

矢作川流域圏懇談会「第4回山部会WG」（豊田市）開催報告

1. 実施概要

(1) 実施概要

○実施日時：平成24年7月7日(土)
10:00～16:30

○開催場所：

【集合】新盛集会所「扶桑館」

【訪問箇所】「あいち森と緑づくり事業」による間伐地、加塩地域（「団地化」と「利用間伐」）、あさひ製材協同組合、板取の家

【WG会場】豊田市里山くらし体験館「すげの里」

○参加者：22名（事務局含む）

(2) 内容

【プログラム】

1. 現地見学

(1) 「あいち森と緑づくり事業」による間伐地

(2) 加塩地域（「団地化」と「利用間伐」）

(3) あさひ製材協同組合

(4) 板取の家

2. 山部会WG

(1) 豊田市の森づくりの取り組み

(2) 豊田森林組合の概要と取り組み

(3) 農山村振興に関する市民・NPO等の取り組み

(4) 豊田市チャレンジガイドについて



集合写真



会議風景

2. 主な会議内容

第4回地域部会WGでは、豊田市の森づくりの現状について、現地見学をした上で、森づくりや山村振興の取り組みを紹介した上で、各取り組みに対する意見交換を行った。WGで話し合われた内容は以下のとおりである。

- 次のステップに向けて、木材の活用とか定住とかテーマを設定し、アイデア提案することや流域圏の若者（森林技術労働者など）が集まる場をつくるなどの提案が出された。
- 蔵治座長より、全体会議の出席者の提案があり、承認された。
- 今後の予定として、第5回WG（根羽）は、8月24、25日に実施する。また、第6回（岡崎）は10月19、20日（後日26、27日で再調整）、第7回（恵那）は11月16、17日、第8回（豊田）は、12月14、15日を予定し、日程を調整することとなった。

3. 現地見学会概要

(1) 「あいち森と緑づくり事業」による間伐地

豊田市産業部原田氏よりあいち森と緑づくり事業による間伐についてのお話を伺った。

- あいち森と緑づくり事業（人工林整備事業）は、林道等から概ね 300m以上離れている場所あるいは公道より概ね 100m以内の場所を対象に実施している。
- 県の事業 100%で実施しており、すべて切り捨て間伐である。
- 市内の間伐面積 1400ha のうち、436ha が、この事業を活用したものである。



間伐地（北小田バス停付近）

意見交換（ ・ ご意見、提案 ▶ 回答 ）

- ・ 搬出する木材はないのか。（蔵治）
 - ▶ 原則、搬出はしない。ただし、搬出できるものはした方がいいのではという話はでているようだ。（原田）

(2) 加塩地域（「団地化」と「利用間伐」）

豊田市産業部原田氏、豊田森林組合たまり氏より、加塩地域の森づくりについて、お話を伺った。

- 加塩地域森づくり会議では、4ブロックごとに境界確定を行い、森づくり団地計画をつくっている。
- 計画では、利用間伐、切置間伐、地主自力の3パターンの色分けを地主の意向で行い、事業を実施している。
- 事業としては、H20 に杭打ち、H21～調査測量、H22～間伐を実施している。また、利用間伐は2残1伐により実施。



加塩地域の間伐地

意見交換（ ・ ご意見、提案 ▶ 回答 ）

- ・ 切置間伐の部分は県税を使っているのか。（蔵治）
 - ▶ 95%は県税を活用している。（原田）
- ・ 利用間伐ではどれくらい地主に返したいか。（蔵治）
 - ▶ 20万/2haは返したいと思っている。現状では、補助金を入れて、利益とコストがトントンであるが、集約化により、1回に出せる施業コストを効率化していきたい。（たまり）
- ・ 搬出路は恒久的なものか。（蔵治）
 - ▶ 搬出路は、作業道と違い恒久的なものではなく、利用後には、水みちにならないように畝をつくるなどの処置を行い、みちとして残さないようにしている。（たまり）

(3) あさひ製材協同組合

豊田市産業部原田氏、豊田森林組合林氏より、あさひ製材協同組合について、お話を伺った。

- 豊田市唯一の原木市場である豊田森林木材センターで取引されたものがここで製材される。
- 現在では、無垢で使われることがなく、集成材や合板という形でしか使われないため、木材価格は非常に安い。ちょっと曲がっているもので、6000円/m³。
- だいたい40年かけてつくったものが1000円/本くらいにしかなくなってない。あさひ製材協同組合では1500m³/年くらいを挽いているが、数万m³/年くらい挽かないと商売にはならない。



あさひ製材協同組合

(4) 板取の家

NPO法人都市と農山村交流スローライフセンター山本氏より、板取の家について、お話を伺った。

- 豊田市の支援を受けて、古民家を活用し、旭の暮らしに関心を持つ人が、実際に短期居住を体験できるお試し居住の館「板取の家」を2年前にオープンした。
- 板取の家は、2日間から最長で4週間借りることが可能。
- また、田舎への移住を希望している人に対して、移住を応援する組織として「千年持続学校」を立ち上げた。
- 旭地区には、移住をしたくても空き家がないため、千年持続学校の住まいづくり講座の中で家づくりを行っている。
- 現在、旭地区には、3家族が移住し、3家族が移住予定である。



板取の家

4. 山部会WG概要

休憩時間中に、豊田市産業部原田氏より、豊田市の森づくりや山村振興に関わるビデオ放映、矢作川研究所の洲崎氏より、「すげの里」の紹介があった。

(1) 豊田市の森づくりの取り組み

豊田市産業部原田氏より、豊田市の森づくりについてお話を伺った。

- 豊田市は、平成17年に下山、足助、旭、稲武、小原、藤岡と7つの市町村が合併し、それに伴い森林組合も同時に合併している。行政区域は約92,000ha、森林面積は約63,000ha、人工林面積は約35,000haで森林の約55%であり、神奈川県的人工林面積、約37,000haとほ



説明風景

ば同じである。また、私有林の面積は約 56,000ha、森林の約 88%ということで、森林に手を加えようと思うと、私有林が多いということが、非常にネックになっている。

- 豊田市の森林の最重要課題というのは、人工林の間伐の促進に尽きるかと思う。そこで豊田市は森づくり条例をつくり、100年の森づくり構想というのをつくってきた。また、構想を具体化するために今後、10年間で行う施策をまとめた森づくり基本計画を平成20年にスタートしている。
- 計画では、間伐量が10年間で25,000haやらないと追いつかない計算になるが、間伐を倍増しなければならないが、所有規模が小さい、経営意欲が低い、不在地主が多い、地籍調査0%となっており、そこが非常にネックになっている。
- そのため、人工林を集約化しないとできないということで独自の団地化戦略を開始した。団地化では、各地域に「森づくり会議」をつくってもらい、団地設定を行い、市や森林組合がバックアップしていく流れになっている。今年の3月末までに75会議(全体の1/3)ができて、188団地の3,365haが団地化できた。団地化の課題は非常に手間がかかるということ。特に、所有者調査は非常に手間がかかる。また、地域のリーダーが必要なこと、森林組合のスタッフ不足、制度変更への対応も必要。
- 木材利用の点から言うと、公共施設等木材利用促進法が平成22年10月に成立し、豊田市としても、3,000㎡未満の2階建ての建物くらいの公共施設は、原則木造でいきたいと思いますというような基本方針を策定した。そのため、保育園みたいなものが、鉄骨から木造になっていくと思う。
- とよた森林学校を平成18年から、人を育てる人材育成の講座と森を知るという意味での森の応援団を育てるという講座を行っている。
- 「木の駅プロジェクト」として、山から木を持ってきて、トン当たり6,000円で買い取りましょうという事業で、これをモリ券という券で地域通貨として活用している。それから、似たような事業として、豊田市が独自で木材バイオマス活用事業を行っている。これは、1.8mを基準に、16cmまでは1本100円、16cm以上のものは、1本200円で森林組合の木材センターで買い取り、それを豊田市のクリーンセンターが燃料費の名目で年トン3,000円で買い取っている。

意見交換（ ・ ご意見、提案 ▶ 回答 ）

- ・ 市のバイオマス事業と木の駅プロジェクトはリンクしているのか。(今村)
 - ▶ 始めた時期は一緒だが、リンクはしていない。(原田)
- ・ バイオマス活用事業で、個人が持ってきたのは何件くらいか。(丹羽)
 - ▶ 件数は分からないが、全体の2割程度(林)
- ・ 残りの8割はどうしているのか。(丹羽)
 - ▶ 組合が利用間伐で生産している。(林)
- ・ 全部で何トンくらいか。(丹羽)
 - ▶ 全体で500トン。バイオマスに活用しているのは100トン程度。(原田)
- ・ 間伐によって得られた利益は、個人の山は個人に返すのか、団地全体のうち、面積按分して返す形になるのか。(森)

- ▶ 個人別にどれだけ出たかで清算している。(原田)
- ・ それでは、作業道によって土地を取られた人が損をするような気がするが、それは最初に合意形成を図っているのか。(森)
 - ▶ そうである。作業道の負担については、面積按分する場合もあるし、市の補助金を使って受益者の負担を軽減する場合もあるが、地元にお任せである。(たまり)
 - ▶ ただし、作業道が自分のところにあった方が後々の利用価値があると思う。(原田)

(2) 豊田森林組合の概要とその取り組み

豊田森林組合林氏より、豊田森林組合についてのお話を伺った。

- 原田さんの話を聞いて、矢森協が仕掛けて、豊田市が脚本・シナリオをつくって、森林組合は踊っているのかなと感じた。
- 森林組合の事業は、指導事業、販売事業、加工事業、森林整備総事業があり、総額 12 億 2 千 500 万円の仕事をっており、ダントツで森林整備事業が多くて、加工事業が少ない現状である。
- 指導事業のうち、森づくり団地は、平成 23 年度で 1,166ha の施業計画までできた。また、来た人たちに色々なクイズラリーや体験していただいて、最後にフィナーレの餅投げを行うことでまちの人たちにも山の森林組合を始め、木材に関わっていただきたいということで年 1 回もみじ市まつりを行っている。
- 販売事業は、素材生産で平成 23 年度、2 万 1 千㎡出しており、そのうち、高性能林業機械施業による出荷が年々増加している。高性能林業機械は、組合で 9 台保有、リースで 5 台保有している。路網整備としては、作業道が 10 路線で 6,482m、搬出路が 20 路線で 1 万 m 用をつくった。
- 加工事業は、これまで間伐材を法面で使っていたが、経費節減等で使われなくなり、現在は、簡易横断溝「シスイエース」の販売が中心になっている。
- 森林整備は、平成 23 年度で 1,141ha となっており、自力間伐が平成 21 年度に比べ半減している。また、切置間伐は、これまで国の造林補助金を頂いていたが、それが「あいち森と緑づくり」に代わってきている。
- とよた森林学校は、平成 23 年度、募集定員が 270 名に対し、1.52 倍の応募数があり、実際は 301 人が受講した。
- 参考までに、豊田森林組合木材センター市売市況報告書を見ると、14 cm 以下のスギ 3m が 3,452 円。4m が 2,861 円となっており、柱材の 16~20 cm が 3m で 7,300 円、4m で 6 千円弱。ヒノキは、柱材の 16~20 cm が 3m で 10,310 円、4m は 10,662 円ということで、ここ 2 月ほどこの値段が続いており、全国的に安いそうである。それに比べ、搬出コストは 12,000 円くらいかかるので完全な赤字である。



説明風景

意見交換（ ・ ご意見、提案 ▶ 回答 ）

- ・ 売立価格のうち、ヒノキが安値で 3,000 円と書かれているが、実際に 3,000 円で売っているケースもあるのか。(蔵治)
 - 実際に 3,000 円の札を入れても森林組合は落とさないなので、実際は売っていない。

(3) 農山村振興に関する市民・NPO等の取り組み

NPO 法人都市と農山村交流スローライフセンター山本氏より、豊田市の農山村振興に関する市民・NPO等の取り組みについてのお話を伺った。

- 今日、行政と森林組合の話聞いて全く異なる視点で活動を行ってきたと感じた。それを言葉に表すと「森と農山村における市民の一切の能力と人材の再生と獲得の試み」であり、行政や森林組合ではこれを中心にはできないと思う。
- そのような立場でやってきて何が起こったかは「農山村へのシフト 今・未来」シンポジウム資料に書いてあるとおりであり、2010年3月から毎年、年度終わりに開催している内容である。
- 矢作川水系ボランティア協議会では、森林ボランティア宣言が重要。まずは、流域の考え方が出ており、森が荒廃したのは行政が悪いと言っていない。心の荒廃まで言っている。そこでもう手をこまねいてられないので森林ボランティアの意味、位置づけがしっかり書かれている。
- その活動に先立ち2003年から、豊田市が主催した2泊3日の森林ボランティア養成講座（森林塾）では、2つの良いことがあった。一つは林分調査がみっちり勉強になること。もう一つは安全な伐倒である。この二つを覚えたら、山の見方や実践がスムーズに行えるし安全になった。また、参加者は受講したら、さようならではもったいないので、森林ボランティアをやっていこうとなった。そのため、チェーンソーは、木を切る道具ではない、森林とは何かを、認識する道具なんだという発想で、森林ボランティアを出発した。
- 2006年より、豊田森林学校が開校し、毎年、その講座をおこなったら森林ボランティア団体ができる形になっており、当初5団体だった矢森協は現在14団体になっている。
- 森の健康診断のよい点は、1. ここでは、あなたが主人公、マニュアルを読めば、何故何をどのように測定して落とすのか分かり、行動できる。いわゆる専門家による、知的、いじめ。リーダーや先輩、常連によるパワーハラスメント、これが無い。2. 力の源泉、自然への共感と、豊かで楽しいコミュニケーションが得られる。道々の野草や樹木のなどの姿を知る。鳥や風の音を聞き、効率を追わず、楽しくて、ちょっと役に立つという運営が、素直で等身大の自分を取り戻してくれる。3. 特定の見解の押し付け、隠されたもくろみもない、先入観なしに森を訪ね、森に聞く、結果報告書は誰も責めない、要求もしない、後味さっぱり、各自の役と行動の綬を信じて疑わない、あらゆる立場、考えの人にも、安心して活用いただける。とても前向きで健康的なものである。
- とよた森林学校には、間伐ボランティア初級講座の他、リピーターのレベルアップであ



説明風景

る間伐技術ステップアップ講座も行っていましたが、不況の影響下でなくなってしまった。その代わり、多くの市民を受け入れる講座をもっと重視していくということで、とよた森林学校の卒業生でOB会をつくり、そこで自己負担3万円かかる講座を実施し、大好評を得た。OB会は発足当初は80人だったが、現在は160人になっている。

- 旭の木の駅プロジェクトは、市の木質バイオマス活用事業とは決定的な違いがある。市の事業はエコ的な観点は素晴らしいと思うが、自治的な観点がない。木の駅プロジェクトは、地域の人たちが、地域の森林にちゃんと責任を持ってやっていくという考え方を実践的に示している。根本的には、森林の保全を含めて、農山村の住民自身が、山村の住民自身が、自分たちの山は、自分たちできっちと見られる。そして必要ならば、行政や森林組合と一緒にやるという観点も含めて自治的にやっていこうということで、それが、いろんな動きを生んできている。
- とよた都市農山村交流ネットワークは、豊田市が合併して、都市と農山村の共生を1つの目標の一つとしていたので、セカンドスクールというものを行った。セカンドスクールは、小学校5年生の農山村体験の2泊3日やろうというので、豊田市がお金を出して、3回くらいおこなったが、4回目ぐらいから、農山村自身の人達の方で、これやらないといけないということで、やり出したのが、とよた都市農山村交流ネットワークである。ミッションは、私たちの子や孫たちが、住み続けたいと思う、帰りたいと思う、そのような山里にしたい。訪れる人が、また来てみたいと思う、住んでみたいと思う、そのような山里にしたい。そのような里山の、山・川・里で、自然にふれ、山仕事をして、野郎仕事をして、人と交わることが、幸せだと思う。そんな輪を広げたい。ということ。
- 農山村へのシフト千年委員会は、自分たちのやっていることを説明して、その中で、互いに協力できることはやりましょうということで、一つの例でいうと、町場でやっている green maman というお母さんたちの団体が、毎月朝市を出している所へ、M-easy の若者たちがつくった野菜が並ぶ。あるいは、アグロ・プエルタという若い諸君が町場で農業だとか、そういうものに関心がある人達を、田舎の方に送り込むとかしている。
- その他、千年持続学校、足助炭やき塾、北岡ゼミ、夜学でおこなっており、大学並みの勉強ができる。島崎先生の聞き書き、スローライフ通信とホームページ。スローライフ通信は2ヶ月に1回、いろんな団体の動きとかを知らせるのに、とても役に立っている。
- 2012年度の展望概観は、本当に農山村が、都市や流域の基準にならないといけないだろうと。それが持続的な社会かなということが実は書いてあるし、そういった形で、今ずっと動き出している。
- すげの里は、建物で6千万円かかっている。これは豊田市がつくったが、農山村振興というよりも、豊田市全体が都市と農山村の交流の基準を変えていかないといけないという思いを、自治体として持った施設。僕らは、ここの場が、そういった空間になるようにということで、今、着々と動きつつあり、実際そういう動きが、今でできている。

(4) 豊田市チャレンジガイドについて

豊田市総合企画部安田氏より、農山村地域の暮らし、集落活動を応援するガイドブックの紹介を頂いた。

- 豊田市では、農山村振興の話を、単に過疎問題ではなく、都市と農山村の強い所は、延ばし合って、弱い所は補い合っていくような観点で行っている。その中で、山本さんの話は、住み続けることができる農山村地域、人を迎え入れることができる農山村地域という同じ思いで行っているのではないかと、改めて感じさせて頂いた。
- 合併して、総合局ができて、都市と農山村の共生が、重点テーマとして豊田市で力入れて行ってきたが、縦割りの中、それぞれの分野でどんどん施策が増えていく中で、支所が対応できなかった。そのため、農山村振興に関わる施策を一つの冊子にして、皆さんに提供し、これを議論の材料にして、より良いものを作っていこうという観点から農山村振興施策・活動事例集チャレンジガイドを作成した。内容としては、鳥獣害対策、定住促進、産業振興、集落維持の4つの重点的な取り組みとして進めていく。
- 集落活動事例集チャレンジガイドは、65歳以上の高齢者の方が半分以上で、100人未満の小さな集落となる小規模・高齢化集落が今後10年間でかなり増える想定があることから、気づきを含めて、何かできないかどうかということで、先進的に取り組んでいる事例を紹介することも含めて、全集落に回覧板させて頂いている。



説明風景

意見交換（ ・ ご意見、提案 ▶ 回答 ）

- ・ 山本さんからお話頂いた「農山村へのシフト 今・未来」シンポジウム資料は、この懇談会で作成を予定している「山村再生担い手づくり事例集」の案として出している。この資料は基本的に豊田市内の取り組みが中心に紹介されているが、この流域版がつかれるといいと思う。（洲崎）
- ・ 豊田市では、合併の一つの大きな課題として、農山村振興に取り組んでいる。そのやり方として、行政の本部の方での横の連携を取りつつ、支所の方にも担当を置きつつ、NPOや市民活動などが縦、横、斜めに絡み合いながら行っている。ただし、現状としては、過疎地域の人口減少は止まっていない。旭地区は止まったか。（原田）
 - ▶ 自然減はどうしようもないが、社会減は1年止まった。（安田）

【今後の進め方について】（ ・ ご意見、提案 ▶ 回答 ）

山部会蔵治座長より、流域圏懇談会について説明し、意見交換を行った。

- ・ 山本さんは、豊田市内で活動されてきたが、それと矢作川流域全体とのつながりをどのようにすべきだと考えているのか。（蔵治）
 - ▶ 将来的なことを考えるならば、流域圏ということで繋がっていければいいと思う。ただし、自治体は、自治体単位の方が動くので、例えば、岡崎なら、岡崎の自治体と活動団体が協働で展開しながら、持ち寄ったり、良いところ取りをお互いしながら、流域圏全体を視野に入れていければいいと思う。（山本）
- ・ 今年の3月までは、市民だけで話をしてきたが、4月から大きく変わったのは、行政と森林組合さんに入っただいて、議論が拡大している。議論が拡大したことによって、逆

に市町村境界や県の境界が、目に見える形で出てきていると思う。そこを流域圏懇談会では、どう乗り越えるのかを考えて行かないといけないと思うが、都市と農山村の良いところ取りを流域圏の中で展開していけばいいと思う。(蔵治)

- これまで回った4つの地区にはそれぞれ特徴があるが、全然お互いのことを知らなかったということが一番よく分かったこと。また、活動団体の横の連携もあるようで行政と同じように無く、同じテーブルで話し合う場が設定できるのがまさに流域圏懇談会ではないか。2巡目をところでは、活動の自慢だけでない葛藤みたいな部分もぶっちゃけ話をする場を組み込んでいけば広がりができるのかな。(丹羽)
- 今日は、豊田の豊富な事例を聞いたが、この豊田で起きていること、豊田の市民がおこなっていることが、豊田の領域を出て行かない。私は、岡崎市民とか豊田市民という範疇を出て流域圏住民という新しい概念を生み出したい。流域圏が一つならば、流域圏住民も一つだと、長野県であろうが岐阜県、愛知県であろうが、市も町も村の領域も、県の領域を越えて、市民だったら動ける、考えられる。今回、事例集をつくることによって、それは豊田の範疇を越えている。県の境を越えていく。そのために流域圏懇談会はあると思う。優れた先進事例を、全ての流域圏の中に広がるようにということが、我々の大きな狙いだったと思う。(黒田)
- 私も参加して、いろんな場所の取組みを見て、今日の取組も素晴らしいと思っている。その時に、これマネしたいなとか考えた時に、自分のとこだけに、配布するのではなくて、もっと一致団結すると。もっとも自分たちは、根羽住宅を使ってもらいたいがその場がないので流域圏懇談会で発信ができると思って参加した。次のステップでは、木材の活用、定住とかテーマを設定し、攻めどころとか、アイデア提案などを出し合ったらいいと思う。(今村)
 - 今日の話をもとに、人と地域の問題というの、あまりにも大きな括り過ぎて、実は細かくテーマにして分けられるのも、ありそうな感じがする。(蔵治)
- 原田さんに聞きたいが、森づくりを行うモチベーションは何か。(今村)
 - 平成9年に森に関するところに足を踏み入れ、それ以来ずっと携わっているが、やればやるほど森の大切さが、分かってきた。水道水源保全基金を勉強していた時、神奈川県では90億円を注ぎ込んで、丹沢山系林を、何とかしろと言っていたが豊田市ではせいぜい数億円しかできないことから、何を豊田市では、やれるかというふうな発想で、仕組みを大きくしてきた。やっぱり、元は人工林を何とかしなくてはというところ。東海豪雨もあったし。(原田)
 - ここの流域は、「流域は一つ、運命共同体」という言葉が、昔から言われているが、カビが生えてしまっており、実態としては矢作川水源基金の活動があるだけである。私は、根羽村の住宅を知らしめるべきだと思うが、愛知県では県が違うために動いてくれない。それが流域圏という動きであればできると思う。このような連携も復活させなければいけないと思ったことがモチベーションの1つである。(原田)
- 流域圏懇談会というのは今後、続くのか。(山本)
 - 現時点では、事務局では9年計画の図を描いていて、今3年目。最低でも9年間続くものだが、9年で終わるかといったら、それは別の話でという中で動いている。また、

3年で1ターンなので、今年度の終わりには、一度、総括しなさいければいけない状況である。(蔵治)

- ・ 提案してあることは、やれることなので、やればよいと思う。それと、流域圏の若い森林技術労働者の人たちがまず出会うテーブルをつくったらどうか。同じことを行っている若い人たちは一体どうしようとしているのかをみんな話したいと思う。そんなことが楽しいのではないか。(山本)
- ・ 森林技術者の場や地域コーディネーターの場など流域圏の中で、良いところ取りをしあう場をつくる役割が4つの地域を回ってみて、流域圏懇談会の役割として出て来てしまったという感じ。これはやらなければならないと思う。(丹羽)
- ・ 今の提案はどうですか。(蔵治)
 - 今言ったような形で、若い者が集まってくればよいが、この場ではちょっとしゃべりづらい。一杯呑みながら、交流が持てればよいと思う。(南)
 - 次回は泊りがけなので、各地の森林組合に声をかけたらどうか。(洲崎)
- ・ このような場をなんとか定期的に決めてきければよいと思う。それについては、今後の議論のテーマとして取り上げるということで。(蔵治)
- ・ 最後に、今後の予定であるが、まず7月22日には、第8回市民企画会議、第7回勉強会が予定されている。また、8月3日には午後1時半から全体会議が予定されている。全体会議には、元々はかなり制限が、厳しかったが、交渉の結果、私が推薦する人が、出席出来るかという仕組みになったので、私としては、市民会議山部会の部会長の稲垣さん、副部会長の黒田さん、大島さん。関連団体は、4つの地区の森林組合の方々、市町村からは平谷村、根羽村、恵那市、豊田市、岡崎市。そして、学識者の枠では、私と、丹羽さん、須崎さんで出したいと思いますが、よろしいでしょうか。(蔵治)
 - (了解)
- ・ これはあくまで、メンバーとしての出席者という話であって、この全体会議、後半もありますので、傍聴していただきたい。オブザーバーとして来ていただくのは、全く自由なので、是非、時間があれば、覗きに来てもらいたい。(蔵治)
- ・ また、2巡目の所で、5、6、7、8と4回連続とやらせていただきたいということで、最初は根羽で、8月にやる事が決まっている。24日は懇親会、25日は議論あるいは見学を行うか分からないが丸一日行うことで大丈夫か。(蔵治)
 - 宿は確保できているので大丈夫。(今村)
- ・ その後の6、7、8回の、10月、11月、12月についても皆さんかなり週末が詰まってきていると思うので、ここで決められるのであれば日にちを固めていきたい。10月は14、15日くらいを11月は19、20日で仮に入れておくことにする。12月については、森の健康診断の報告会、恵那報告会ともセットで、やろうという話があるが、16、17日で仮に入れておく。(蔵治)
- ・ これまで、4回地域を回ってきて、それぞれ知らないことや驚き、気づきと学びがあって、それがよく分かってきた。次のステップでは、さっきも話に出た場づくりがあるのかなと今日は感じた。また、次にステップに入るので、よろしくお願ひしたい。(丹羽)

以上